

渋沢栄一『論語講義』原稿割記(2)

学而第一 1~10章

笹倉 一 広

凡例

- ・本稿は前号掲載の割記(1)総説に続くものである。原稿第2回分の終わり、学而篇第10章まで。今まで知られていなかった原稿に見られる渋沢の書き入れの翻字と、原稿の基づくところ、特に『三島論語』『実験論語』との関係を主眼に置いて考察したものである。不備の点は大方のご叱正を仰ぎたい。
- ・原稿およびその起草者、総説については前々号・前号掲載の拙稿を参照されたい。
 渋沢栄一『論語講義』の書誌学的考察 『言語文化』48号2011年12月
 渋沢栄一『論語講義』原稿割記(1)論語総説 『言語文化』49号2012年12月
- ・総説の本文底本には前稿と同じく『論語講義』の『講義録』を使用した。
- ・原稿と『講義録』の誤字、脱字、送り仮名の訂正の類は一々注記していない。原稿との間に見るべき異同のある場合は適宜注記した。
- ・『講義録』は正字・総ルビであるが、常用漢字体を用いるルビは省略した。漢文部分の訓点や送り仮名も省略した。
- ・渋沢の書き入れ・削除は**太字**で示した。書き入れの翻字にあっては、変体仮名・片仮名は平仮名にし、適宜濁点・句読点も加えた。漢字は一律常用漢字体を用いた。判読不明文字は[?]で表示した。
- ・渋沢が削除した部分は[]で括り、二重取り消し線を付した。
- ・書き換え部分については、原則書き換え後の文字を先に、削除文字を後に示した。
- ・渋沢の書き入れでも、原稿の誤字・脱字等に類するものは省略した。
- ・渋沢の書き入れで、推敲の跡がみられるものは、最終字句を採った。
- ・書き加えて読みにくくなる場合は、句・文節・単語単位で示した。
- ・各章経文の冒頭に付した番号は筆者がつけたもので、学而第一第四章曾子三省章は「01-04」と表記した。章の番号は『論語講義』(1975新版)に付されたものと同じである。
- ・【字解】の語釈には便宜上、番号を振った。
- ・筆者の割記は2格低頭し、頭に○を置いて記した。
- ・割記の中でいう「踏襲」「引き写し」「引用」とは、ある程度の文字・語句の異同はあるが、その箇所に基づいていることが明白なことをいう。
- ・略称 『講義録』：月刊『二松学舎講義録』掲載の「論語講義」
 大正12(1923)~14(1925)年 二松学舎
 『三島論語』：三島毅(中洲)『論語講義』大正6(1917)年 明治出版社
 『実験論語』：渋沢栄一『実験論語処世談』大正11(1922)年 実業之日本社

○東京都立中央図書館蔵『論語講義』原稿第1冊には、《講義録》3回分の原稿が綴じられている。《講義録》上での掲載内容は

第1号（大正12年4月） 総説 ～01-02 途中 16頁

第2号（大正12年5月） 01-02 途中～01-09 途中 16頁

第3号（大正12年6月） 01-09 途中～02-01 途中 16頁

であるが、原稿としては4部からなり、次のようである。

①総説 原稿用紙36枚

②01-01～(01-02) 同 (9)枚 注：01-02の原稿はない

③01-03～01-10 同 33枚

④01-11～02-01 同 28枚 「論語講義第三回」のゴム印あり

①②が1号相当，③が2号相当，④が3号相当となる。原稿の体裁が異なること，書き入れの粗密が異なることなどから，①の総説は先に渋沢の手に先に渡ったものと思われる。③④に渋沢がいつ書き入れをしたかを伺い知る手がかりは今のところない。

論語講義

二松学舎長子爵澁澤榮一口述

尾立維孝筆記

学而第一

【論語】凡て二十篇。篇毎に其首の章の二字を取りて篇に名く。別に意義あるにあらず。学而篇は凡て十六章なり。

○最初の3行は原稿にはあるが，《講義録》をはじめ活字になったものにはない。活字版はいずれも総説に続いてページを改めることなく，すぐに学而篇が始まっている。原稿では総説と本文の学而篇では原稿用紙が改まり，体裁も違う。総説冒頭に記された「仰せ」に従ってか，「口述／筆記」となっている。

○続く部分，原稿では「論語凡て二十章。章毎に其の章の首の二字を取りて篇に名く。意義あるにあらず。」となっており。「学而篇は凡て十六章なり。」はない。篇・章の使い方は《講義録》が正しい。これも以前述べたように，原稿から版組用原稿に転記された際になされた改訂であろう。こういった改訂箇所はまま見受けられる。

○篇名題の後に篇に対する総論を述べること，歴代注釈書の体裁に同じ。『三島

論語』を襲う。

【01-01】子曰。学而時習之不亦説乎。有朋自遠方来。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。

【訓読】子曰く。学びて時に之を習ふ。亦説ばしからずや。朋遠方より来たるありⁱ。亦樂しからずや。人知らずして愠ⁱⁱらず。亦君子ならずや。

i:原稿「あり」なし。 ii:原稿作「怒」,『実験論語』同作「怒」

【字解】①子は男子の尊称なり。春秋時代にはその時の先達長者を称して夫子と曰ふ。夫子を単に子と称するは孔門より始まる。②曰は許慎の説文に。口を開き舌を吐くを曰となすとあり。象形の字なり。即ち口を開き談話するを指して曰となすなり。③学は説文に覚と訓ず。人の道を覚るに先後あり。後覚者は先覚者に学ぶ。これを学となす。その学ぶ所は何ぞや。朱子曰く。蓋し士となるに始まりて聖人に至るに終る。孔夫子の志す所。顔子の学ぶ所。子思孟子の伝ふる所。皆この学なり。④時習之は。習は。鳥の雛が巢を離れんとして。飛ぶことを学ぶの称なり。雛幾度も飛んで。自由自在に巢を離れ得るに至らざれば止めず。之と同じく学ぶ所を復習して。遂に熟達するに至る義に用ふ。時の字に就ては古来二説あり朱子は時々之を習ふなりと解す。即ち我が邦俗に所謂ときとときの意或はをりをりの義に解す。猪飼敬所曰く正業の余。行事の暇を以て。時々習うてこれを熟するを言ふなり。この説朱子に同じ。而るに謝良佐曰く時習之とは。時として習はざること無きなりと。是れ時々刻々の謂にして常住座臥しばらくも習はざる時なきの意なり。余【渋沢】は此第二説即ち謝氏の説に従ふ。その理由は。人の道を学ぶは即ち日々の実生活に適用するがためなり。然らば則ち学は行ふの半にして。学ぶ所を實際に行施するに間断あるべからず。時々刻々習熟して始めて知行合一の本意に叶ふべし。もし朱説のごとくんば。先づ道を学び置きて而る後に。業務の余暇に学ぶ所を復習すること【次第】となり。学と行ひと個々別物に分れり。学問は人間の实生活に何等の交渉なきに至らん。是れ朱子学の空理【空学】に陥り。【学者は】論語読みの論語知らずと嘲けられし所以なり。我が邦徳川幕府の学政方針は朱子学【を教ふる】に存し。その弊や学問は士大夫以上の修むべきものとなり。農工商の三階級にある多数の人民は無学文盲の徒となり了る。則ち学問と実業と全く分離し。学者は実務を知らず。実業家は道を学ばず。国民挙げて不具の片輪漢となりたるなり。【~~ゆ。乃ち~~国勢振はず幕府倒壊せり。】要するに人間の学問なる以上は。実生活を離れたる学問あるべからざると同時に学問を離れたる実生活もまたあるべからず二者あひ合し

て始めて完全なる【大問の】学問と謂ひつべきのみ。これ余【洪沢】が謝氏の解釈を是とする所以なり。⑤不亦説乎。は凡べて不亦とあるは、皆亦を以て語助となす。則ち此処の亦は無意味の字なり。⑥説は悦と通用す。⑦有朋鄭玄曰く。師を同じくするを朋と曰ひ。(志を同じくするを友と曰ふ。⑧樂は樂も悦も共に欣歎なれども。分けて之を言へば。悦は欣びの心中に在るを言ひ。)i樂は欣びの心に満ちて容貌に発するを云ふ。⑨人不知は上位にある人。我が学業の成就りて官途に用ふるに足ることを知らずして。我を登用せざるをいふ。⑩慍はいきどほりと訓す。朱子は解して怒りを含むの義となす。蓋し心中に不平の意あるこれ即ち慍なり。⑪君子は成徳の人を謂ふ。本来は上位に立ち民を治むる人を君子と称す。然れども成徳の人にあざれば之をなすこと能はず。故に学成りて徳高き人をば縦令上位に立ずと雖も亦之を君子と曰ふ。本文の君子は即ち是れなり。

i: () 部分原稿なし。浄書の際の書き落とし。

○『三島論語』では、書き下し文を記した【訓読】の項はなく、各章の大意を記した【章意】という項目が置かれる。これは逆に洪沢『論語講義』にはない。

○【字解】は11条で、注釈語句は『三島論語』の【摘解】に全く同じ。内容もほぼ踏襲している。

①「春秋……」以下について三島は清朝中期の考証学者趙翼の説であることを明記するが、略される。②「談話」は三島は「談説」。この部分皇侃義疏に拠る。皇侃は「談説」。③三島は「学」を「覚」「効」いずれに解すべきか佐藤一斎・石川竹厓ら諸説を引いて考証するが、その部分は省かれる。説文は三島が一斎の言として引用。「人の道を覚るに先後あり。後覚者は先覚者に学ぶ。これを学となす。」は集注を本にした原稿の解釈。三島は朱注のまま引く。後半「朱子曰く」以下は【摘解】に同じ。三島の注にも問題があるが今は措く。④「習」について鳥の雛云々は【摘解】の文字を概ね使う。「時」についての解釈は三島が朱注を採り、謝説を否定するのに対して、原稿は謝説、四六時中説を採り、大きな対立を見せている。⑤【摘解】の要点部分のみ引き写し。⑥集注。【摘解】と全く同じ。⑦【摘解】後半の鄭注を引き写す。⑧【摘解】に全く同じ。⑦から⑧にかけて原稿浄書筆耕者が筆写の際に「いわく」につられて飛ばしたと思われる部分があるが、《講義録》ではきちんと補われている。⑨語句表現に若干の異同があるが、【摘解】に同じ。⑩冒頭に「慍はいきどほりと訓す。」を補い、以下は【摘解】の前半のみを引き写す。【摘解】後半の、腹を立てることではないとの三島の説は、洪沢は「立腹」と解釈しているので省略さ

れる。①若干の語句表現に異同はあるが、三島字解をそのまま踏襲。最後に「本文の君子は即ち是れなり。」と付す。

【講義】 此章は三節に分れ人の処世上尤も大切なる教訓である。故にこれを論語の冒頭に掲ぐ。三節相互に何の関係もなきが如く見ゆれども。仔細に玩味するときは三節貫通して分離すべからず。学而時習之不亦説乎とは。人の人たる道即ち斯文を学んで。時々刻々行住座臥これを自己の職務上及び処世上に適用習熟すれば。その学びし所尽く我が物となり。即ち物我一体の境に達す。是れ知行合一の極致なり。豈に喜悅すべきにあらずや。その上に有朋自遠方来とは同学同志の朋友。近き者はさらにもいはず。遠き地方に在る人までも。我風を聞きて尋ね来たる者ありて。共に学べる所を切磋琢磨し益々道に進み。又己が学び得たる所を朋友に伝へ。その朋友は更にこれを他に傳へ。転々して善を多数の人に及ぼすに至らば。是れ亦たのしむべき事にあらずや。

○以上は『実験論語』の「学而第一の冒頭」という節(p.14)に依拠し、ほぼ踏襲している。特に渋沢の書き入れもない。異なる点を挙げれば、「学而時習之不亦説乎とは」に続く部分、「その上に」の手前まで、『実験論語』では「斯文たる聖人の道を学び、修め習ふという事は、仮令単独でも悦ばしい愉快なことである。との意味である。」となっている点である。原稿には「物我一体の境」といった禅的表現がある。

我が学成就し道德通達して。世に用ひらるべき資質備はれるに、上位にある人我を知らずして登庸せざる時は、自ら天命に安んじて、人をも**咎め** [怨み] ず。天をも**怨み** [咎め] ず。只管にその道を楽しむは、成徳の君子にあらざれば、豈によく此くの如くなる事を得んや。○既に学習して心に歓喜すれば。ますます進んで自ら已むこと能はず。如此くなる時はその名自然に世にきこえて、近き人は申すに及ばず。遠方にある朋友も尋ねて来るべし。しかある時は在上の人にも登用せらるべし。而かも猶知られずして世に用ひられざる時も、学問は我が身のために修めし也。我れを知ると知らざるとは人にありて。我れの関る所にあらずとなし。些の不平もなく愚痴をも言はず。是れ必ず学達し徳邵き人にあらざれば能はず。故に不亦君子乎と謂ふて賞賛せられたる也。

筑前の学者亀井道載翁の著論語語由に拠つて見ても。本章は人の処世上頗る大切なる教訓である。既に自ら習ひ自ら修めた道を二三の友達になりとも伝へ。共に話して楽しむやうになつた以上は。更に之を衆人に伝たへ。それが広く世間に行はるるやうにせようとすれば、世間が之を容れてくれず。さればとて苟も君子たる道を修

むる者が之に立腹するやうの事あるべからず。是れ人知らずして愠らず。亦君子ならずやの本義である。併し通常の人はこの境に処して。大抵は気を腐らして悲観するものである。かくては。折角学を修め道を修めたる君子の詮なし。夫れ学問は身のために修むるものなれば。人に知らると知られざるとを問ふべき限りにあらず。余は及ばずながら八十四歳の今日まで論語の此の教訓を身に体して、我身の尽すべき程の事を尽しさへすれば、縦令其事が人に知られず。世間に容れられようが容れられまいが。一向頓着なく。決して愠るとか立腹するとかいふ事はせずに来た積りである。今の青年諸君は果して如何なる感想を抱かる乎。

○『実験論語』の続く「世間に知られざるを憂ひず」という節に依拠し、所々は前節も利用する。渋沢の書き入れ訂正は1箇所。「不怨天、不尤人」は論語では憲問篇にも見える語。歴代注釈に「人不知」を登用せられぬ意に解するものないわけではないが、渋沢栄一には見られぬように思う。『実験論語』の依拠した部分にはない。明治の気風が原稿に書き加えさせしめたものか。

論語の教訓は単に之を紙上に論評したり。又は之を【**貴き教訓なりとして**】高閣に束ねてしまひ。二千四百年前に孔子の説かれた教は。今日の世の中に一々行はれるものでないとする【~~して。敬遠主義をとり。得手勝手をいふ~~】人が多いやうに想はれる。是れ余の大に遺憾とする所である。孔夫子の教訓は。二千四百年前でも。二千四百年後の今日でも。之を実行して些の差支をも見ない程の通俗的【**好師範**】である。かの墨子の兼愛説。楊子の自愛説や。老荘の無為説の如き。【**如何にも面白く感ぜられ。**】一分の真理を含んで居るに相違ないが。さて之を【**提げて**】実行せんとすれば。どこにか差支を生じて【**?**】行詰りとなるが。孔夫子の教は全くその趣きを異にし。上は君王士大夫より。下は田夫野人に至るまで。凡べての階級を通じて。实地に**施行**【**行施**】し得らるるやうに説かれたのである。則ち他の空理空論とはその根源を異にし。決して【**敢て**】一方に偏せず。先づ仁を主とせられたるに相違ないが。仁ばかりでは実際に臨んで、取捨に惑を生ずる恐れあるを【**べきを豫じぬ**】慮【**を**】ばかられ。仁と相竝んで義【**を**】も説かれ。更に【**その上なほ誤解なきやうに。**】礼智信をも説かれ。仁義礼智信の五常を以て。人倫の根本として【~~なし。之を~~】論語の中に説明せられて居る。斯道は実に我ⁱⁱ明治天皇の教育勅語に仰せられしごとく。之を古今に通じて謬らず。之を中外に施して悖らぬもので。坐しても行ひ起ても行ひ得べき。平々坦々の實際的処世訓である。

i: 原稿は「差支を【?】行詰りとなるが」。【?】は渋沢による塗抹で1文字判読不能。脇に「生じて」と渋沢の書き込みあり。《講義録》では「差支を生じ。行詰りとなるが」

ii: 原稿なし

○『実験論語処世談』の続く「青年子弟の感果して如何」(p.15)と次の「今の賢者の処世振りを悲しむ」(p.17)の冒頭部分を下敷き書き直したものの。渋沢の書き入れが多い部分である。

○渋沢の消した【**貴き教訓なりとして**】は『実験論語』では「有難い貴い教訓なりとして」とあり、同様に【**得手勝手をいふ**】は「勝手の挙動に出らるる」、【**如何にも面白く感ぜられ。**】【**提げて**】【**べきを豫じめ**】はそれぞれそのまま「如何にも面白く感ぜられ」「提げて」「べきを豫じめ」、【**その上なほ誤解なきやうに。**】は「それでも猶ほ、誤解を生ずる者いづるのを憂いたものと見え」と『実験論語』にあり、尾立の起草した原稿を修正というよりは、自分の『実験論語』の修正の感がある。

○「実に我明治天皇の教育勅語に仰せられしごとく。」は『実験論語』にない文言。而るに世間【**今の人**】殊に実業界の人々が【~~で。少しく利口な人といはる。人は。夫抵其の根本の理想が全然自分杯とは違つて。やはり~~】仁義は仁義として一方に【~~で隅の方に~~】押し【**片**】付けて得らる【~~仕舞ひ。利ける~~】丈の利益は取得【~~持は~~】せねばならぬとして【~~決め。仁義の観念から離して考へ~~】。聖人の教や論語の明訓を。余物にする【~~其ま。行ふのでは今日の世の中が渡られぬ金儲けは出来ぬと。考へて居られる~~】人が多いやうに見受らる。甚しきに至ては其中【**我が**】心には仁義【**説**】を無視しながら体面を【**世間体を取**】つくらふために仁義を説く【**の假面をかぶる**】人もある【**あり**】。是れ仁義を賊するものなり。青年諸君よ。願くは**其事業**で【~~か。る真似をせず。~~】錙銖の利を計る【**争ふ**】間にも。仁義道德に注意して、強欲【~~を实地に行つて往つて見給へ。商工業を営めば敢て~~】無理なる争奪【**争む**】をせずとも。利益は自ら**順利**より生ずる【**懐に入つて来る**】ものであることに信頼されたい。是れ余が八十年來実験する所であるから【~~なり~~】。安心して【**孔夫子**】の論語の教訓を**實際に施行**【**行用**】せられんことを祈るのであります。蓋し【**さて**】論語二十篇幾多の説話も要するに本章にⁱ【**いふ所の**】範囲を出です。之を開卷第一に置くは。編輯の体を得たりといふべし。

i: 「に」字、原稿は「の」

○『実験論語』の「今の賢者の処世振りを悲しむ」の節を下敷きにした財界批判部分である。渋沢の書き入れも多いが、前段と同じく渋沢が削除した部分ももともと『実験論語』にあるものが多い。例えば、【~~少しく利口な人といはる。人は。夫抵其の根本の理想が全然自分杯とは違つて。~~】は「少し険しく立ち廻

られるやうとする方々などになると、其の根本の理想が全然私なぞと違つて」となっている。『実験論語』は記者が来訪しての口述であったが、つい語りすぎた部分を修正し、俗な表現を行儀良く改めているように見受けられる。

○末尾部分のこの章を冒頭に置く意義を記すこと、歴代注釈に同じ。「論語二十篇……いふべし」は『三島論語』の本章の末尾と同一。

【01-02】 有子曰。其為人也孝弟。而好犯上者鮮矣。不好犯上。而好作乱者。未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其為仁之本与。

【訓読】 有子曰く。その人と為りや孝弟にして。上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして。乱を作すことを好む者は。いまだこれ有らざるなり。君子は本を務む。本立て道生ず。孝弟なる者は。其れ仁を為すの本与。

○本章原稿を欠く。総説は別立てとして、第1回分の原稿は本章までの筈である。

原稿用紙は通番が打たれた01-01の9枚分のみ。最後の原稿用紙には余白がある。本章は原稿用紙を改めて浄書されたものの、逸失したものと思われる。逸失経緯も現在不明。当然渋沢栄一の書き入れ有無についても不明である。

【字解】 ①有子一姓は有。名は若。孔子の弟子。魯の人なり。有子と称するは。本章は有若の門人の編次する所なれば。其師を貴びて子と書けるなり。②孝弟一よく父母に事ふるを孝といひ。よく兄若くは年長者に事ふるを弟といふ。弟はもと兄弟の弟なれども。転じて弟がよく兄に事ふる徳に名づけて弟と称す。後世には弟を悌の字に作りて兄弟の弟と分別せり。③犯上一上に在る人を凌ぎ犯すをいふ。上位にある人を軽蔑侮辱するをいふ。④鮮一少なり。⑤作乱一道に悖り理に背きて争闘若くは殺傷なすをいふ。⑥務一力を一事に注ぎ専行するをいふ。⑦道生一君主に事へ衆人に交はる等凡そ人間の諸道をいふ。⑧為仁一許慎の説文に曰く、仁は親也人に従ひ二に従ふ。通論に曰く、仁は兼愛す。故に人二を仁と為す。皆二人相親愛するの意なり。凡そ天下の善徳美俗。親愛より出でざるはなし。故に仁以て天下最大最上の美德と為す。孔夫子教訓の標準実に此に在り。⑨為仁一為すは猶ほ行ふと曰ふが如し。⑩与一疑の辞なり。併し此にては実は疑ふ所あるにあらず。自ら謙遜して敢て断言せざる意と解すべし。

○【字解】は10条で、前章と同じく【摘解】の内容をほぼ踏襲している。原稿では「軽蔑侮辱」「殺傷」といった殺伐たる語句が加えられるのが目につく。

①「その師を貴びて子と書けるなり。」を原稿は加筆。③後半を「上位にある人を軽蔑侮辱するをいふ。」に原稿は差し替える。④「若くは殺傷」を原稿は挿入。

⑥「專注」を「注ぎ専行」とし、他は同文。⑧⑨とも【摘解】にほぼ同じ。

【摘解】は⑧⑨併せて1条。

【講義】有子は孔門十哲の一人ではないが。論語の編纂は有子と曾子との門人がこれをなしたものであれば。孔夫子の弟子中でも有若と曾参には特に「子」の敬称を附し。有子、曾子と論語の中に記された程の賢人であつて。有子の言説は甚だ尊重すべきものがある。抑々人間には如何程智慧があつても。其人情に親切なる所がないと。其智慧は悪智悪覚に帰し。悪い事をして人を害し。身を賊ふに終るべし。故に余は人を使ふにしても、智慧の多き人よりも人情に厚き人を選んで、採用して居ます。孝悌の道に厚く親兄弟に親切な心のある人を好んでとります。さういふ人の中でも。千に一つは悪ひ事をする者がいないとはいへないが、先づ安心して使ふ事が出来ます。而してさういふ人は上を犯し侮るが如き事をなすは甚だ少くない。既に上位に在る人を犯し侮る事を好まざる者は。乱逆の振舞をなすといふ如き事は「未だ之れ有らざる也」で絶対になきなり。則ち人情敦厚の人孝悌の道を弁へたる人物を集めて。官府の公務を経営し銀行会社の事業を弁成すれば。決して不始末を生じ破綻を起す心配はなかるべし。

○『実験論語』「孝弟は仁を為す本なり」の章、「孝弟と三省との功德」の節(p. 34)の前半部分をほぼそのまま利用している。『実験論語処世談』がである調であるところを、時折ですます調に原稿が改編するのは「口述」を意識しての工作か。『実験論語』で「兎角悪い事をするやうになり勝のものである。」を原稿は「其智慧は悪智悪覚に帰し。悪い事をして人を害し。身を賊ふに終るべし。」と厳しく書き換える。原稿の筆の特徴である。

本章は二段に分つて見るがよい。一段は首句より「未之有也」までにて事実を述べ。二段は君子より以下にて右事実に対する主旨を論じたるなり。さて第一段の事実は右に述べた通りなり。第二段の論旨は凡べて君子の事をなすは力をその根本に用ふ。根本すでに立てば。枝葉自づから繁茂するが如く、君主に事へ人衆に交るの道は自づから生ずる者なり。然らば則ち上文の孝弟は即ち是れ君に忠を尽くし衆を濟ふの仁を行ふ本ならんか。故に学者まづ此の手近き孝弟に力を用ふれば、仁道は自づから此れよりして生ずべしといふなり。

○この文章は渋沢の言でなく、『三島論語』の【講義】部分からの抜粋である。

第一段については渋沢の『実験論語』から引いたので、「さて第一段の事実は右に述べた通りなり。」として三島の論は省いている。

【01-03】 子曰。巧言令色鮮矣仁。

【訓読】 巧言令色には少なし仁。

○『実験論語』 巧言令色鮮なし仁。『三島論語』 巧言令色ニハ鮮シ矣仁。

【字解】 ①巧言一言語を巧みに使ひ飾りて。人の氣に叶ふやうにすること。②令色一令は善なり。色は一身の容貌なり。容貌を盛かんに粧飾して、人の意に適するやうにすること。③鮮一は少なり。之を極言すれば実は無しといふべきを。余り切迫に言放ず。曲折して鮮しといへるなり。古人用語の深意知らざるべからず。

○3項とも**【摘解】**を踏襲する。字句異同のみ。解釈に差異なし。

【講義】 人に接するに言語弁説を巧みに使ひかざり。或は顔容を粉飾して美麗にし。以て人を悦ばしめんと努め。外面の体裁にのみ力を用ふるやうの人は。よし敢て諂諛して欺瞞する悪意はなしとするも。此の類の人には不仁者多くして仁者といはるゝ人は絶えて無しと断言せられて、以て学徒を戒しめられたるなり。

○『三島論語』のこの章の**【講義】**第一段の、若干語句言い回しに違いはあるが、引き写し。一般的通行の解釈である。

夫れ仁の一字は孔夫子の生命で。又論語二十篇の血液である。若し孔夫子の教訓より仁を取り去つたならば。恰も胡椒の辛味のぬけたと同然となるであらう。孔子は此の仁のために生命を捧げられた程の大切な文字で、孔子の一生は仁を求むるに始まり。仁を行ふに終つたといふても差支なからん。上は堯舜を祖述し文武を憲章し下は王侯士大夫に應對するにも、必ず仁道に立脚したもので、孔子の精神骨髓は仁の一字に存するなり。是故に孔子は仁を以て。一面倫理の根本とせられたると同時に。他の一面においては政治の本義とせられたり。王政王道もつまり仁から出発したものである。商工の実業の如き亦仁を以て大本とせねばならぬ。仁を大本とすれば、工業に粗製濫造なく。商業に騙瞞詐術なく。商工業道德高まるべし。かの愛、怨、信、毅といふも結局仁の変化と見るべし。要するに本章は外飾の人は仁者少きを言ふ。蓋し「剛毅木訥近仁」の反対なり。方今世上の青年を見るに、多くは此の剛毅の氣象に乏しく軟弱輕薄の傾きあり。外面の体貌は至極立派なれども内面の心裡状態は全く空洞のやうに見受けらる。かくては。一国の隆興は望むべからず。元來日本人は世界無比なる大和魂を備へて居る国民なれば。青年諸君よ益々励みて剛毅の氣象を養ひ、進取の意気に培かはざるべからず。巧言令色些の誠意なき如き者は、真の文明国民とは言ふべからざるなり。

○この一段『実験論語』には見えぬようである。『実験論語』では「巧言令色と直言との利害」という節 (p. 40) でこの章を扱っている。内容は直言も結構だ

が時と場合を考える必要があるというもので異なる。「商工業に於ける仁の道」という節(p.39)に政道も実業も仁を本にしなればならぬという記述が見えるが、青年への言及はない。起草者の筆によるものであろう。

維新の際の三傑の随一といはれた。西郷隆盛公の如きは、実に仁愛の深き同情心に富んだ人であつた。その達識非凡なりしことは言はずもがな。人に親切にして同情心に富んで居られた一例は。かの山岡鉄舟【先生】が江戸城からの使者となり。駿府の征東總督府を訪問して参謀隆盛公に面会した時。公の徳川慶喜公を備前藩に御預けにしようといふ提議に対し、不承知を唱へるや。公は山岡【先生】の情を酌み。即座にその説を納れて備前に御預けのことは止めにすべしと快然一諾せられた。是れ公の【大に親切にして】同情心に富める【仁心】の発露【露現】といはざるべからず。公の剛毅なる大丈夫【兕】にして平生至つて寡黙なりしは。実に君子の趣があつた。薩南の健児三千人に擁せられて。明治十年に賊首となれる如きも。語り仁愛に過た為めと見る事を得べきである【七】。

○西郷と山岡の故事は『実験論語』「幕政廃止の意なかりし大西郷」(p.72)から引き写し。渋沢は山岡鉄舟に対する「先生」という敬称を塗抹しているが、『実験論語』にはある。敬称、爵位などについての書き換えも渋沢の書き入れの特徴のひとつである。

【01-04】 曾子曰。吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。与朋友交而不信乎。伝不習乎。

【訓読】 曾子曰く。吾れ日に吾が身を三たび省みる。人の為に謀りて忠ならざる乎。朋友と交りて信ならざる乎。伝はりて習はざる乎。

○『実験論語』では「伝へて習はざるか」と訓じているが、意味は「伝はりて」と解している。

【字解】 ①曾子 曾は姓。名は参。字は子輿。孔子の弟子。魯の【国】人なり。孝経を著したる事がある。本章は曾参の門人が編纂せしより。其師を尊びて曾子と曰ふなり。②吾日三省吾身 吾れは曾子自ら曰ふ。三省は必ずしも三度と曰ふにあらず。屢の意なり。省は回顧して自ら檢察すること。自己の行為を自ら檢察するなり。③忠一己の心力を尽くして余す所なきを忠といふ。④信一誠意を以て人に接するを信といふ。⑤伝一師より受け学ぶをいふ。

○五条とも【摘解】に同じ。①「本章は」以下は【摘解】にない。01-02字解②に倣つての原稿の加筆。②【摘解】の見だし文字は「三省」のみ。「三」「省」それぞれの注は原稿も踏襲。原稿は「吾」にも注するが、【摘解】にはない。

逆に、【摘解】には「三」が後に続く三つの事項ではないことを注するが、原稿は省く。

【講義】曾子自己の修身上の工夫を述べて曰く。吾れは吾れ自身の行ふたる事を。毎日々々幾度となく回顧省察して怠らず。それは何事ぞやといふに。第一人の爲めに事を謀りて尚十分に吾が心力を尽くさざる所はなかりしや次に友達と交際して吾れの言行に不誠実の所はなかりしや。又師より受け学びたる事を捨ておきて復習せざることはなかりしや。斯く常々省察して、若し忠ならず。或は信ならず。又或は習らざる事ありしならば。必ならず矯正に勉めたりと。自ら治むる工夫至れり尽くせりといふべし。

○上段部分、いかにも渋沢の口述のように書かれているが、『三島論語』の【講義】第一節を潤色したものである。この章については『実験論語』「孝弟は仁を為す本なり」の章、「孝弟と三省との功德」の節（p.34）の後半部に渋沢の解釈が記され、最後の「伝不習乎」については、聞いただけで実行を怠っていないかという意味とし、「習」とは実践（してものにする）と解している。

余は曾子の此言が尤も吾意を得たりと思ひ。一日に数度吾身を省みるといふまでには参らずとも。夜間床に就きたるのち、其日に為したる事や。人に応接したる言説を回想し。人の爲に忠実に謀らねばならぬ。友人には信義を尽くさねばならぬ。又孔夫子教訓の道に違ふ所はなかりしやを。省察するに怠たらぬの【積もず】である。若し夜間之をなさざりし時は。翌朝前日の行動を省察する事となせり。余が家族にもつとめて之を行はせるやうにして居る【~~す~~ます】が、今日の人には此心掛が少くないやうに見える。人の爲に忠実に謀り。友人に信義をつくし。孔夫子の仁道を行ふに怠らなかつたならば。【大は】他より怨まるゝ事なく。実業家は【農工商の実業家は】必ず其家業の繁昌を見るべし。政治家は【必ず】人民に謳歌せらるべし。余が毎日来訪せらるゝ人には。誰彼の別なく【御】面会【申】して。包まず隠さず愚見を述るは。此章句を聊かなりとも身に行つて見たいからである。

さて此章句の事を身に行へば。今後その過ちを再びせぬやうの気を起し。行を慎しむ上に好結果を生ずるは勿論であるが。之と同時にその日その日の事が。一々記憶の上に展開されてくる爲めに。之を順序よく心意の裡に。並列して一目に検察する事を得。深い印象が頭脳に刻まれて。自然に忘れられぬやうになり。記憶力を強健にする効能も【亦】あるのである。旁々以て余は曾子三省の実行を今日の青年諸君に御勧め致します。

○上の二段に述べられている事々は、渋沢栄一のエピソードとしてよく知られて

いる。『実験論語』では「孝弟と三省との功德」の節(p.34)及び「三省と記憶力の増進」の節(p.42)に記されているものを一つにしている。「人の為に……謳歌せらるべし。」は見当たらない。原稿の筆にかかるか。

【01-05】子曰。道千乗之国。敬事而信。節用而愛人。使民以時。

【訓読】子曰く。千乗の国を道むるに。事を敬して信じ。用を節して人を愛し。民を使ふに時を以てす。

【字解】①道一治なり。千乗一古へは戦争をなすに甲者は車上に在りて戦へり。四頭の馬を一車に駕す。之を一乗と曰ふ。一乗に甲士三人乗り込み。歩卒七十人附属する制なり。この兵車を出す数に依りて、国の大小を定む。千乗の国又は万乗の国と称する是れなり。馬融の説に曰く。司馬法に六尺を歩となし。歩百を畝となし。畝百を夫となし。夫三を屋となし。屋八を井となし。井十を通となし。通十を成となし。成は革車一乗を出すと。則ち千乗の賦は其地千成にて。方三百十六里余に居ると。即ち八百家より兵車一乗を出す割合にて、千乗は八十万家となる。当時諸侯中の大国に当る。されば之を通じて諸侯の国を千乗と称したり。②敬一は事を**莊重**【貴重】にする意なり。③節用一は程よく費用を限定して。苟くも奢侈に涉らざるを曰ふ。④時一農隙の時。即ち耕作のひまの時なり。

○3条とも**【摘解】**に拠る。①一部議論を省略して踏襲。②**【摘解】**の朱注を退け、古義を採る旨の文字は略し、結論だけを引く。④**【摘解】**の続く「必ずしも冬に限らず。」を省く。

【講義】本章は孔夫子が国を治むるの道。五要あることを説かれたるなり。抑々一国を治むるには。種々の政事あれども。其行ふべき程の政事は。大小に拘らず。之を慎重にして。敢て軽忽にせず。人民をして安心して上に信頼せしむべし。官の費用は必要にして。已む事を得ざるものに限定し少しも無駄や奢侈をせず。人民の財産を損傷せざるやうに注意し。人民を親切に憐愛して。其資産を厚く保護すべし。人民を使役して工事を行ひ又は演武を為すには。耕作に妨げとならぬ時を選んで**【之を】**使役すべし。凡そ一国を治むるの要は。以上の敬事と信と節用と愛人と使以時の五つに在り。今日は教育普及し。政事も衆智を集めて。施行する方法を取り。其**【政治の】**形式は二千四百年前と大いに**【その】**趣を異にすれども。二千四百年後の為政者も本章の五事を。主義方針として事を行ふ外なかるべし。啻に国を治むる上に於て然るのみならず。一会社を経営し。一家を主宰するに就ても。亦同然なり。此五事を行てゆけば。銀行でも会社でも将た一家でも。その業繁昌**【七成功】**

するに違ひなし。青年諸君は常に此の五事を心に掛けて。世に立たれたし。

○この段、『実験論語』には見えぬようである。『三島論語』の講義を下敷きに、原稿が敷衍したものと思われる。

節用の秘訣は「量入為出」の一事に存す。余は明治二年の冬新政府に仕官し大蔵省に入つて。三年十二月まで専ら大隈侯に使はれたが。四年の暮には大隈侯は大蔵大輔より参議に転任し。大蔵卿伊達宗城伯も辞職せられ大久保利通侯が大蔵卿に任ぜらる。大阪の造幣頭井上侯が大隈侯の後任として大蔵大輔に任ぜられたれば。余は大蔵大丞として井上侯に使はるる事になつた。井上侯はよく余を知つて [下され] 肝胆相照らす程の親しき間柄であつた。新政府の当時の財政状態は。歳入は約四千万円位であつたが [であるが]。之とても明確ならず。歳出の方は殆んど摺み払ひと同様にて。金のある時は仕事をするが。金がなくなれば止めるといふ有様であつた。余はこれではならぬ。財政の整理をせねばならぬと思ひ込み。種々苦心して。歳入の統計を作り。即ち入を量り。之に応じて [歳出を調節し。即ち] 出を為す計画中 [で]。それがいまだ成就せぬの [中] に。五年八月大久保大蔵卿は不確実の歳入四千万円の内より陸軍省の経費額を八百万円。海軍省のを二百五十万円合せて千五十万円に。定める事にしたし [から] とて。当時余と同列の大蔵大丞安場保和 [男爵]。谷鉄臣などを喚んで其可否を諮問せられた [る]。之が為め余が折角 [苦心して] 工夫中の財政計画は。破壊せられてしまふから。[余は] 大いに大久保卿 [公] の意見に反対せざるを得ない事となり。諮問会議の席上にて [公に対し余の] 反対意見を述べて曰く。総じて財政は「量入為出」の原理に従はざるべからず。外国 [国家] の財政には [財源が豊富になれば]。或は「為出量入」の変例に依る場合もあるべけれども。今日はいまだ国家の財源が不明瞭にして [発達して居らず]。歳入の精確なる統計さへ備はらざるに当り。兵備が [は] 如何に大事なればとて、之がため壱千 [五百] (稿本「百」を《講義録》は「十」に改める) 万円以上の支出を匆卒に決するは本末顛倒の甚しきものなり。宜しく統計が出来上り。歳入額の明確になつた後に於て事の輕重を考へ。之に応ずる支出額を決定せられたし [すべし] と。此日井上大蔵大輔は列席せられず。列席の [列席せられたる他の五十以上の] 老大丞等は [が] 大久保卿 [公] の威勢 [偉大なる人格] に圧せられた気味で、別に異見も述べず。唯々として賛意を表せるに拘らず。僅かに三十を越したばかりの年少者たる余が [一公の折角心に決めてをられた所に] 反対説を [したのを] 聴かれて、小癩な奴とでも思はれたものか。大久保侯は [公は] 怫然色を作し「しからは渋沢は陸海軍の方はどうでもよいといふ意見か」と余に対して詰問せられたの

である。之に対し余は「如何に私が軍事に通ぜぬとて〔~~は申ながら~~〕兵備の国家に必要な位のことは心得て居る。併し大蔵省の歳入統計が出来上らぬ前に巨額の支出を決定する〔~~をなす~~〕は不適當〔危険〕の御処置である」と抗弁したが。他の大丞に反対意見がないので。遂に卿〔公〕の意見通りに決定せられた。余はその決定を暴戾と思ひ其翌日辞職せんとしたれど井上侯に〔~~廃藩置県の制定まるまでせめて在官せよと~~〕慰撫せられ。姑らく在職せしが。終に〔翌〕六年五月三〔七〕日井上侯と共に骸骨を請へり。爾来民間の事業に従へるが。大正十二年の今日にても。当時余が持つて居た「量入為出」の意見は正当であると思ふ。これは独り国家の上に限る事でない。銀行を営むにも。会社を料理するにも。將た一家を治むるにも。皆此原理に従ふ事を肝要とす。然らざれば必らず失敗を取るべし。青年諸君の宜しく心得らるべき事なり。

○よく知られた渋沢下野のエピソードである。あちこちで活字になっているが、『実験論語』では一連の「大久保利通に嫌はる」「大久保に反抗す」「大久保佛然色を作す」「薩人の暴戾に憤る」(p.54~58)の節に詳しい。この4節の語句をつなぎ合わせて纏めたものである。渋沢の書き込みも多いが、塗抹書き換え部分の多くは『実験論語』にある文字をそのまま引いた部分である。辞官の日付は『実験論語』にはなく、渋沢が訂正したように5月3日が正しい。

節約〔節用〕を旨とせられた近代の名宰相は。寛政年間〔一時〕徳川幕府の老中首席となられた奥州白河城主松平越中守定信〔楽翁公〕である。定信〔公〕は徳川八代將軍吉宗の孫である。〔公の〕時の將軍家齋もまた吉宗の孫なり。公は田安家を継ぎ。家齋は一橋家より入つて宗家を継ぐ。楽翁公は質素、勤儉、謙讓を好み。驕奢〔豪奢〕とか〔金錢を〕浪費するとかいふ事は大嫌ひで。全く道德經濟一致即ち知行合一の活学者であつた。之に引替家齋將軍は極めて奢侈〔豪奢〕な人で、泰平無事の極盛時代なりしを以て。此時代を大御所時代と曰ふて万事〔凡そ之事が〕華美に流れ。恰も仏蘭西の路易十四世と相類似しておつた。楽翁公は之を非常に痛心〔心配〕して。かくては徳川家の為めによろしくないと思はれて。天明六年八月三十歳にて老中首席となり色々〔苦心して〕矯正に努められた。寛政五年に引退せられたけれども。公は常に徳川氏の為めに心配せられた。果せる哉。盛極つて衰來る。大御所時代過ぎ去りて後は、徳川の權威漸く衰へ遂に倒壊に至つたが〔滅亡す〕。其原因の一つは本章に所謂用を節して人を愛する事を忘れたるが為めである〔~~存~~母〕。勿論幕府の倒れたる原因は。此外に種々あるべきも〔?〕一尊皇の足らざるのに〔謙讓の徳を忘れたことが主なる原因である〕。蓋し我邦の歴史を按ずるに。〔我国

体にあつては。天朝を蔑みし奉るが如き態度を以て。政権を壟断して居る際に。他の一方に天朝を奉じて天下に号令する者が現れれば。必ず前者は倒れて後者の勝となるなり。徳川幕府の末造に当り。天朝を尊重せずして。政治上には天朝の御指図を受くる理由がないなどといったやうな。不忠の態度に出でし折柄。薩長起ちて皇室を尊崇し。遂に維新の大業を成就せしは。全く古来の歴史を繰返したるなり。

○前半の衆翁松平定信の儉約については、『実験論語』「徳川光圀と松平衆翁の至徳」(p. 679)の節からの引き写し。本来この節は08-01 泰伯篇冒頭章に対する解説である。渋沢が衆翁を高く評価し、『衆翁公伝』を編纂したのは周知の通り。渋沢の書き換え語句は、前段同様ももとは『実験論語』にあった語句であったものが多い。

○後半の尊皇の勢力が政権を取る史観は、『実験論語』「幕府の倒れるは当然」(p. 453)の節の最後の段を引き写したものの。この節も本来は06-22 雍也篇斎一変章について述べた節である。

【01-06】子曰。弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁。行有余力。則以學文。

【訓読】子曰く。弟子入る則ち孝し。出づる則ち弟し。謹みて信し。汎く衆を愛して仁に親しむ。行ふて余力ある。則ち以て文を学ぶ。

○『実験論語』入っては則ち孝。出でては即ち弟。謹にして信。

原稿は『三島論語』に同じ。

○『実験論語』親^{ちか}づき、 『三島論語』親^{ちか}づく。

【字解】①弟子一人の弟たり子たるものといふ義なり。②入則孝一家に入れば則ち父母及び長上へ孝順すべしとなり。③出則弟一は家を出れば則ち他の年長者又は有徳の人を恭敬すべしとなり。④謹而一は行ひに常度ありて易らず日々此の如くにして放漫ならざるをいふ。⑤信一は誠実にして人をも吾をも欺かざること。⑥汎一は広くなり。⑦衆一世間衆くの人。⑧親一近くなり。⑨仁一仁徳の人を曰ふ。⑩余力一余暇ある時の意。⑪文一古への聖賢の書。即ち詩書六芸の書をいふ。

○②③は**【摘解】**にはない。また、**【摘解】**には⑩と⑪の間に「以一用なり」の条があるが、原稿では省略。②③以外、各注釈は**【摘解】**を踏襲。

【講義】本章は孔子が人の子たり弟たる者に、実行を先にして、文芸を学ぶ事を後にせよと誨へしなり。孔子の教育主義はすべて空理空論に流れず。躬行実践を重んずると同時に。其實行の動機となる精神に於ても、亦重きを置けるは勿論なり。次

には是等を飾る文事も。余暇があれば学べと仰られしなり。人生の修飾たる礼儀作法文雅の嗜みも亦此文の内に在り。~~[古今東西を問はず是等の嗜みなき人は。野卑にて御座には出し難し。]~~ すべて人の子たり弟たる者は。入りて内に在る時は父母及び尊族親に孝を尽し。出で、外に在る時は親戚郷人等に接するに恭敬を失はず。広く世人にも親切を尽くし。自己のみの便利を謀つて人を困苦せしむるが如き事なく。且仁徳を備へたる君子人に近親して。以て己れの徳性を涵養すべし。此くの如くなれば是れ人道を實際上に学得せるなり。これを実学と曰ふ。実学既に我身に備れば。人の人たる道に適ふを以て。此外に求むる事なきに似たり。然れども文を学ばざれば、聖賢の教訓に暗く、事理の当然を識らず。自然に私意に陥ることなしとせず。故に余力あれば詩書を読み礼楽射御書数の六芸を学ぶべし。本章の事みな人に接する實際上に就て言へり。決して紙上の空論にあらず。余は青年の時より実学を旨とし。架空の大言壮語を嫌へり。明治六年実業界に身を投じて以来今日まで、此方針を墨守して敢て易らず。経済道徳は一 **[致]** にして不二なりと信ずるも。亦聖学の実践説に基けるのみ。今の人言語の上や筆の先にては。立派の事を曰へども。之を实地に行はんとする信念。及び勇氣に乏しきが如し。慨嘆に勝ふべけんや。自ら実行せぬ故に孔聖の教が。果して今日も猶事物に適當なる哉否を会得せず。而かも漫然之を排斥せんとなす。是れ所謂食はず物嫌ひの類にあらずや。

○『実験論語』では「行いて余力あらば文を修めよ」の節(p.43)は正にこの章を立てて解説しているが、文字・内容とも全く一致しない。ここに拠るとは言えぬ。『三島論語』と類似した部分もあるが、朱注部分であり必ずしも『三島論語』を借用したとも言えぬ。今暫く措く。

○渋沢の塗抹した部分、いかにも原稿の勇み足的な文字に思える。

[01-07] 子夏曰。賢賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。与朋友交。言而有信。雖曰未学。吾必謂之学矣。

[訓読] 子夏曰く。賢を賢として色に易へ。父母に事へて能くその力を竭し。君に事へて能く其身を致し。朋友と交り。言ふて信あらば。未だ学ばずと曰ふと雖ども。吾れは必ず之を学びたりと謂はん矣。

[字解] ①子夏一姓はト。名は商。字は子夏。孔子の弟子。衛の国の人なり。②賢賢一上の賢は賢人として尊敬愛好するなり。下の賢は賢者の才徳を備へたる人を曰ふ。主として師を指すなり。③易色一易は換なり。色は女色なり。男子の女色を好む心は天性 **[真誠]** なり。此の女色を好む心に換へて賢師を好むなり。④竭力一竭

は尽なり。吾が力のある限りを尽くすを曰ふ。⑤致身一致は委なり。己れの身を君に委ね任せて。其命令のまゝにし。水火をも辞せざるを曰ふ。故に一旦急あらば身を殺して仁を成す等は。此致の字の内にあり。⑥言而有信—自ら言明せる所を必ず覆踐するを信と曰ふ。⑦曰未学—自ら謙遜して吾は未だ道を学ばざる者なりと曰ふ事なり。⑧吾必謂之学矣—以上の如く其人は自ら謙遜して私しはいまだ学問せずと曰ふとも。子夏の眼より見れば慥かに是れ学問せし人なりと謂はざるべからずとなり。

○【摘解】は6条。⑥⑧が原稿では加わる。①②③④は【摘解】を踏襲。①は「の国」が加わる。②朱注：有誠【摘解】：人の女色を好む心は極めて誠なり《原稿》：……心は真誠なり 渋沢「天性」に改める。⑤【摘解】の前半部を踏襲。後半の三島の按語は省く。⑦【摘解】は己の謙遜、他人からの批評の両説を提起し、一斎の両義説を紹介する。⑧『三島論語』の【講義】を利用した原稿の語釈であろう。

【講義】本章は凡そ学問は人道の外に学問なるもの存せざるを言ふ。是れ孔子の教は實際学にして実行の外に学問なきを道破せるなり。宋の頃に至り一向世事に関係せざる学者が。經学を祖述した結果。論語を一種の文学宗教のやうにして仕舞つて。追々学派を生じ。学問と実際との間隔が次第に生じ。竟に經学は一般に高遠なる空理を説き。我邦の先儒も其弊を承け。学問は士大夫以上の学ぶべきものとなし。農工商の実業家は之を圏外に排し学問は学問。実業は実業と二途に分離し。全く聖人実学の精神に違ふに至れり。孔子時代には「有民人焉。有社稷焉。何必讀書然後為学」と云ひたるやうに、学問と実際とは少しも区別がない。日常実行せし事を書いたのが論語である。かくてこそ論語が日常の教訓として尊き価値のある訳なれ。之を聖書の如くに取扱ひ。考証的に研究するに至つては。一種の弊に陥つて居ると思ふ。本章子夏の説亦此意を釈明せり之を翫味せば。思ひ半ばに過ぐるものあらん。

○冒頭の一文は『三島論語』【章意】冒頭の一文。「人道」は「人倫」に作る。

○続く部分、『龍門雜誌』第247号（明治41年12月、『渋沢栄一伝記資料』第41巻p.372）掲載の「論語に関する談話」からの引き写し。

子夏が曰く。茲に一人あり。其人日常履行する所を見るに。賢徳の師を尊敬して之を好み重んずること。恰も女色を好むの心を以て之に換へ。父母に事へては、能く自己の力のある限りを尽くして孝行し（兄弟姉妹は父母の中に含む）君王に事へては。能く其身を君王に捧げて。余念なく忠義を尽くし。朋友と交際するには。誠実を旨とし。自ら口に出して言ひたることは必ず実行す。（朋友の中には夫婦及び衆

人を含む)。此の人自ら謙遜して私は未だ学問したる事なしと曰ふとも。吾れは断じて此の人は既に十分に学問成就したる人なりと謂はんとす。何となれば以上の行ひが出来るは即ち人道の大本が手に入り居るなり。此外に其果して学びたることあるや否を問ふ必要なきなりといふ意なり。

○『三島論語』の【講義】の引き写し。(兄弟……)(朋友……)も【章意】の文。欧西の科学東漸して。今日は諸種の学問開け居れり。人々そ其好む所の科学を修むべきは勿論の事なれども。人倫の大本に至ては。本章に謂ふ所の君父師友の接際に外ならず。此の接際に於て誠実の心を失はざれば。必ず忠孝信愛の道立ち。申分なき善美の人なり。官吏たると商人たると將た農工【**農**】たるとを問はず。本章の行ひ出来る人は。立派なる学者以上の人なり。何んぞ【**其嘗て何**】師に就き学修せしや否を問ふ事を須ちるんや。実学の真面目誠に此点に存す。余が明治六年五月辞官以来専ら経済道德一致説を唱へ。人間生活上の経済觀と。人道修飾上の道德觀と不二論を高潮する所以のもの豈に他あらんや。其根源は本章の履践的実学に在り。実行さへすれば其他に何の要もなきなり。架空の理論は人間に用ふる所なし。余が辞官の決心をした時に。井上侯は「時機さへ来たれば。野に下つて意の如く行ふも可からう」と曰はれたが。親友であつた玉乃世履(大審院長)氏は左の如く忠告せられた。君は現に官界でも可なりの位置に居る。将来極めて有望なるのに。今辞職するのは実に惜しい。野に下つて商人となるは。金儲けの為めかは知らぬが。世間からは輕蔑をうけて。一生官吏の願使の下に働く事になるだらう。他に方法もありさうなものではないか」と頗る親切な忠告であつた。余は之に対し断乎として答へて曰く「金を溜める為に辞官はしない。実業家が今日の如く卑屈で。世間の尊敬を受けぬのは。一つは封建の余弊であらうが。一つは商人の仕方【**仕方**】が宜しくないからである。欧米では決して官民【**官商**】の懸隔が日本の如くではない。余不肖ながら此弊風矯正の為に骨を折りたい。宋の趙普は論語の半部を以て天子を輔け。半部を以て身を修めたといつて居るが。余は論語の半部を以て身を修め。半部を以て実業界を矯正したい決心である。乞ふ先き永く見てゐて呉れ」と云つた。爾來行住座臥。一身を処するにも。事業を經營するにも。必ず論語に準拠【**依拠**】して断を下した【**せり**】。

○本段前半部分は出所不明。あるいは原稿の起草に掛かるか。

○後半の辞官の決断に対する井上・玉乃の慰留の言葉はよく知られているが、上掲「論語に関する談話」にほぼそのまま同じ部分がある。『実験論語』には見えない。

近代の英傑木戸侯爵。伊藤公爵は能く言ひ能く行ふ人で。大西郷侯爵。山県公爵は不言実行的人。後藤伯爵（象二郎）や。大隈侯爵は能く言ふも。言ふたことを悉く行ふといふ人ではなかつた。黒田伯（清隆）や江藤新平氏に至つては一旦言ひ出した事は無理でも通し抜く人であつた。実業家では岩崎弥太郎氏古河市兵衛氏の如き強硬なる実行家であつた。すべて事物は議論よりも実行だ。実行の伴はぬ論は如何程筋道の立つ【**先論**】でも其詮なし。青年諸君よ。父兄に対しては孝順の行ひをなし。天皇陛下に対し奉りては忠義を心掛けてその人の職業々に就て。一身の利益のみならず。一国の公利公益を傷らざるやう忠実に働き。師匠に対しては己が道徳及び知識の父母たることを思ひ。之を尊敬して恩を忘れず。友人【**や世人**】に交るには信義を旨とし。敢て言行相反せざるやうに行ふて見給へ。必ず上下内外の信用を一身に集め。往くとして可ならざる所なく。家を興し名を揚げ。国家に大功を致す事となるべし。是れ八十四歳の老人が堅く保証する所なり。

○実行力についての月旦は、『実験論語』p. 294の論語04-24「君子欲訥於言、而敏於行。」について述べた部分に西郷・山県・大隈・伊藤の実行力について言及がある。岩崎・古河・江藤・黒田については『実験論語』の「岩崎弥太郎と古河市兵衛」の章（p. 411）や「江藤新平と黒田清隆」の節（p. 148）にある。それらを原稿が纏めたのであろう。

○後半の部分は出所待考。この章に即しすぎている感がある。原稿の起草によるものか。

【01-08】 子曰。君子不重則不威。学則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。
【訓読】 子曰く。君子重からざれば則ち威あらず。学も則ち固からず。忠信を主とし。己れに如かざる者を友とすることなかれ。過ては則ち改むるに憚ること勿れ。
【字解】 ①君子に二様あり。徳を以て言ふ者と。位を以て言ふ者と。是なり。本章の君子は位を以て言ふ。即ち上位の人を指すなり。第一章の不亦君子乎の君子は。徳を以て言ふ。彼此相異れり。②重一は重厚の謂なり。自ら持すること厚重にして軽浮ならず。しつかりと落ち着き居るを言ふ。③威一は威厳なり。④学則不固一は固は堅固なり。学を信じて之を堅守するを言ふ。佐藤一斎翁曰く。学の字の上に恐らくは不の字を脱すと。此説亦通ず。⑤主は。客と対して言ふ。客は出入常なけれども。主人は常住して一家を宰する者なり。平生忠信の心を主人公として失はず。人に接し物を処する。一に忠信を以てすべし。⑥無一は毋と通ず。禁止の辞なり。⑦過一は識らず知らず誤る。之を過と曰ふ。其の誤まれるを識りながら行ふを悪と曰

ふ。⑧憚一は難んずるなり。過失と知りながらわざと過失と認めざる人あり。或は過失と認めながら無理に押し通して改めざる人あり。或は改めんと思ひながら利害の為に速かにせざる人あり。此三者は皆過失を改むる事を憚るなり。

○【摘解】の9条中「勿も禁止の辞」(集注)を原稿は省く。①②③④⑥⑦⑧は【摘解】をほぼ引き写す。⑤【摘解】では焦循の「忠信の人に親しむ」という解釈を紹介し三島の按語を記すが、原稿は略す。

【講義】在位の君子にして内に堅く守る所あり。外貌も亦**〔洗着に〕**落著きて重厚ならざれば。威厳なくして人民をして畏敬せしむるに足らず。その学びし所も堅固に守持する事能はず。物に臨んで迷惑すべし。故に在上の君子は心を立つること敦厚ならん事を要す。且平生忠信を心の主人公として失ふことなく。君に事へ人に接し將た事を処理せば必ず円融無碍にして、往くとして可ならざる所なけん。友は相互に切磋琢磨して学徳を成就すべき者なれば。成るべく己より賢なる者を選ぶべし。己より賢ならざる者を友とすれば、己に益なくして反て損する所あらん。故に友を選ぶには、成るべく己より賢なる人を選ぶを宜しとす。されど己れより賢ならざる友も絶対に拒絶せよと曰ふにあらず。己れに若かざる友は。視て以て鑑戒となすに足るべし。且之を友として愛矜するは君子の美德といふも可ならん。猶又人は過失なき事能はず。唯聖賢の人は過失を知れば直ちに改めて善に遷れども。常人は之に反して憚りて改めず。遂に悪を犯すに至る。故に一旦過失ある時は自ら勇気を鼓して之を改め敢て逡巡して苟くも安んずべからず。然るに世に傲岸の君子ありて、其非を遂げ死に至て悔ざる者あり。井伊大老の皇室尊重を忘れ。**〔幕政に反対せる〕**志士梅田源二郎、頼三樹三郎等を一網に打尽して、極刑に処し。水戸**〔中納言及び〕**老公に閉門を命じ**〔芋〕**。その家人及び忠臣の諫止あるも之を顧みざりしが如き、近くは星亨氏が東京市会議長の職に抛り。市政を壟断して世の非難起るも敢て意とせざるが如き。**〔原内理夫臣が自己の勢張に熱中して他の方面を顧みざるが如き。〕**皆我意を押通したるものなり。是れ豈に在上君子の宜しく為すべき所ならんや。其末路の惨亦自ら招けるものと謂はれざるにあらず。之に反し明治維新の功臣三条公爵**〔芋〕**。木戸侯爵などは自説を固執せず。能く人の説を容れられた。是れ改過遷善の徳を備へた人であると言ふことを得べし。実業家にては森村市左衛門男の如き実に善に遷る意思の強い人であつた。その初めは仏教信者になり。晩年基督教に帰依されたが。とにかくに善を行ふ意思の強かつたことは事実である。**〔安田善次郎氏が財界当代の巨頭となれるに拘らず。忠信を主とする美德に欠くる所あり。非業の最後を遂げたる如き惜しむに余りある事共なり。〕**ⁱⁱ

i: 「他の方面を顧みざるがごとき」は原稿では「反対党を圧迫したるが如き」

ii: 原稿にはあるが《講義録》では削られている。

○前半については、『三島論語』の【講義】の引き写し。友を選ぶことについての部分、三島は廬未人の説として紹介している。原稿での主人公・融通無碍といった禅語の使用も特徴と目される。

○三条・木戸・森村については『実験論語』「三条実美・木戸孝允・森村一左衛門は遷善改過の人」という節(p.767)から引き写し。この節は本来子罕篇第24章(09-24)について述べたのものであるが、第24章の経文は「子曰。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。」で、本章と重複する。渋沢『論語講義』でも09-24で三条・木戸・森村の月旦は再掲されている。

○原・星・安田について、ここにあるような渋沢による人物批評は見つけられなかった。前々稿(凡例参照)で指摘したが、故人名を挙げることなどに対して渋沢は尾立に注文をつけている書き込みもある。原稿の起草である可能性も高い。

○三者のうち渋沢は星亨は残し、原と安田は削除しているのは、渋沢と三者との関係の反映であろう。

○最後の()で括った安田善次郎についての文は、原稿にあり渋沢が塗抹しているが、そもそも《講義録》でも活字にはなっていない。自主規制したとも言えよう。このように原稿にはあるが、活字にはならなかった文章というのはこの後にもよく見られる。

【01-09】 曾子曰。慎終追遠。民徳帰厚矣。

【訓読】 曾子曰く。終りを慎しみ遠きを追へば。民の徳厚きに帰す。

【字解】 ①慎終—は喪に丁り其礼を尽すなり。②追遠—は死したる人の祭祀供養にその誠を尽すなり。③帰—往きて之に趨くなり。もと吾家に帰る義より出づ。人は他の強迫【驅迫】を受けずとも好んで吾家に帰るものなり。本章の帰すと曰ふは恰も人の好んで吾家に帰るに同じく。他より逼らずとも自然に人民の徳風厚きに趨くと曰ふ意なり。

○3条とも【摘解】に同じ。①②、【摘解】が集解・集注そのままなのに対して、やや言葉を足す。③三島【摘解】「往て之に趨くなり。安部井巽曰く、帰の字に、驅迫を煩はさざるの意あり。」原稿は三島の【講義】を参照して加筆している。

【講義】 本章は在上の人が衆民を善化せんと欲せば。先づ自ら其身を修むるを要するを言ふ。大学に上孤を恤めば民倍かずとあると同じ。抑々在上の人。平生孝悌忠信の道を実行するが上に。更に父母及び尊属親や故旧の死没したる時。懇ごろに葬喪の礼**【意】**を尽し。其忌日祥月の祭典を遠き後までも。誠意をこめて追善すれば。下万民も自然にその徳に感化して。敦厚に趣くべし。上より命令督促の労を須ひず。いつとなく良風美俗を成すこと疑なし。然れども在上の人。若し民徳の厚きに趣かんことを求むるが為めに。之を為さん乎。是れ内に誠意なくして。徒らに外面を粉飾する者なれば。何ぞ感化の効あらん。

○冒頭の二文は『三島論語』**【章意】**の文。「抑々」以下は『三島論語』**【講義】**を下敷きにして敷衍したもの。

近年人の為す所を見るに。葬儀や追遠供養に只外面の虚儀を盛んにし。内心の誠意を欠く者多し。甚しきは葬儀や供養を社交に利用し。主人死去の時よりも。其細君の葬儀の方に会葬者多き傾きあり。死去の新聞広告にも有名家の名を借りて之をなすことの例あり。全く曾参のいふ所と反対の現象たり。是れ古今人情の変遷なりとはいへ。甚だ宜しからざる事なり。前途多望の青年諸君よ。世に出で身を立てんと欲せば。宜しく敦厚持重の紳士たらざるべからず。軽佻浮薄の才子は成功せず。葬儀又は追遠祭は。誠意を以て哀傷懐旧するを主眼とすべし。虚礼に奔り虚儀に流るべからず。斯の如く心掛けて行へば。内外自他必らず。自然に敦厚の美風を成すべし。

○当世社会批評部分、基づくところ審らかならず。原稿の起草か。待考。

【01-10】 子禽問於子貢曰。夫子至於是国也。必聞其政。求之与。抑与之与。子貢曰。夫子温良恭儉讓以得之。夫子之求之也。其諸異乎人之求之与。

【訓読】 子禽子貢に問うて曰く。夫子是の国に至るや。必らず其政を聞く。之を求むる乎。抑々之を与ふる乎と。子貢曰く。夫子は温良恭儉讓以て之を得たり。其れ諸れ人の之を求むるに異る乎。

【字解】 ①子禽○姓は陳。名は亢。字は子禽。陳の国の人。孔子の弟子なり。或は子貢の弟子なりと曰ふ説あり。②子貢○姓は端木。名は賜。字は子貢。衛の国の人。孔子の弟子なり。③夫子○は孔子を指す。弟子より尊んで称するなり。④是国○はある一国を指さざる。適く所の諸国を指すなり。⑤抑○は反語の辞なり。⑥温○は冷ならず熱ならざる中間にて所謂温和なり。⑦良○は平易坦直にして悪気なき貌なり。⑧恭○は容貌壯嚴にして敬慎なる貌。⑨儉○は約守して放肆ならざる貌。⑩讓

○は謙遜なり。凡そ此の五つは皆容貌辞気の外面に露顯する者なり。盛徳内に満たば人に応接する際自然に流露するものなり。⑪其諸○は語辞にて意味なし。⑫人○は他人なり。

○語句は12条とも【摘解】に同じ。すべて【摘解】の引き写し。

【講義】 子禽一日子貢に問ふて曰く。我が孔夫子は諸国に適かるゝが。何れの国に至りても。必ず其国君より政事上の相談を受けらるゝは。如何なる理由ありての事か。是れは夫子より求めて其国の政事に与からるゝか。或は国君より請ふて。政事に参与せしむるのか。如何と。子貢此の問に對へて曰く。夫子、盛徳の内に在る者。外面に流露し。人に応接せらるゝに当り。其態度毎に温良恭儉讓なるが故に。各国の君主皆敬信して。夫子に請ふて政事を諮問するのみ。夫子は強て他国の政事を聞くことを求めざれども。此五つの徳望を備へられ為めに他国の政事を聞くことを得るなり。故に夫子の求める方法は。他人の求める方法とは。自ら異なる者あるが如しと。子貢の真意は夫子何ぞ之を求めん。各国の君主夫子の徳に感じて。就て之を問ふのみと曰ひ度かりしも。言語に巧みなる子貢なるが故に。子禽の問語中にある求むるの字を把りて弄却し。婉曲に言ひ廻したるものゝ如し。

○『実験論語』の中には本章をテーマにした節はないようだ。上の段、原稿は『三島論語』の【講義】全文に手を入れて引き写したものである。

子貢の孔子を尊敬して斯く曰ふは。さる事ながら。孔夫子必ずしも求むの意なしと曰ひ難し。余を以て之を見るに。孔夫子六十八歳の老境に至るまで。諸国を巡訪して寧処に違あらざりしは。何の為めぞや。諸国の政事に参与して先王の文化政治を行はんと欲したるが為めなり **[にあらざや]**。されば絶えて求むる意なしと曰ふべからず。或は之を求むる意ありたるやも知れず。之を求めたりとて何の不可なる事かこれあらん。吾志を行ひ人民の患苦を救ひ王道を復興せんとせば。之を求むるも志に忠なる所以なるべし。

○この段、基づくところ不明。原稿の起草か。